

## ADHDと診断された児を持つ母親のストレスに関する考察

浜 本 真規子

### 【問題と目的】

注意欠陥／多動性障害（Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder；以下 ADHD）は不注意、多動、衝動性などの障害を主軸にしている行動の障害である。ADHD はその障害のため、集団生活の場面、特に学校環境で離席行動、授業妨害、集団不適応などの問題としてあがってきやすい。また外見上は普通の子どもとなら違いはないため、実際の社会生活中においてはいわゆる問題児として見られやすく、周囲からの理解が得られないといわれのない叱られ体験を繰り返し、彼らの中に失敗感、挫折感、自己否定が積み重なり（井上、2002），このことは情緒的発達に影を投げかけ、自らを恃むことの不安定さ、ひいては他者への配慮の未熟さや、衝動性制御の拙劣さにつながることが危惧される（榎戸、1999）。

ADHD は通常 3 歳までには発症しているが、診断がなされるのは子どもが小学校に入学して年齢に応じた注意の持続と集中力を含む構造化された行動様式が必要とされるようになってからが一般的で（作田、2000），そのため不注意・多動・衝動性の問題を持つ子どもは乳幼児期の頃は単なる落ち着きのない子として見られることも多い。しかし 1994 年から 3 年間、福岡市で落ち着きのない子ども（1 歳半、3 歳）をもつ母親の育児感情の調査が行われ、落ち着きのない子どもを持つ母親はそうではない母親と比べて有意に育児不安を抱いていることが明らかになった。つまり、不注意・多動・衝動性の問題を持つ子どもを抱える母親の負担はその問題が明らかになる以前から始まっていることが推測される。

不注意・多動・衝動性の問題を持つ子どもにとって親がその特徴を認識し、その特性に見合った対応をとることは重要であり、アメリカではペアレント・トレーニングをはじめ、親の子どもに対する行動療法的アプローチを基礎とした対処法訓練プログラムが開発、実践されている。しかし、日本での実践は遅れており、ADHD をはじめとする不注意・多動・衝動性の問題を持つ子どもを抱える家族は、子どもとの関わり方を日々苦慮しているというのが現状である。また、学校においても不注意・多動・衝動性の問題に関して知識が浸透しておらず、適切な対応を取れている学校の数は多くない。

日本の ADHD をはじめとする不注意・多動・衝動性の問題を持つ子どもを抱える家族の負担は、上記にある

ように大変大きく、今、早急な援助が求められている。そして、そのような子どもの問題や母親を中心とする家族の負担を何とかして打開しようと集まったグループが、ADHD 児親の会である。筆者は ADHD 児親の会に参加し、そこで母親の訴えを直接聞く機会を得、母親の多くは負担を感じていると報告していた。しかし、ADHD の子どもを抱える家族が実際にどのようなストレスを抱え、どのような援助を求めているかということを扱った研究は日本では少ない。従来の研究では、広く発達障害児の親のストレスを扱った研究があるが（植村・新美（1983）；中塚（1984）など）、そこには ADHD の子どもを持つ親は含まれていない。また、先行研究で扱われた発達障害児は、周囲からその子ども達を見れば、何らかの障害を抱えていることを認識するのは難しくなく、また、一見そう見えなくても、多くの場合、その子どもの行動をしばらく観察すれば、誰もがその障害を認識することが出来る子ども達である。そして、多くは特殊学級及び養護学校にその籍を置いている。しかし、今回対象とする ADHD の子ども達は、見た目は勿論、その障害について詳しく知らなければ、障害があるということには周りは気づかず、単なるその子どものわがままや躊躇の問題と考えられやすい。そして、多くの子どもが普通学級にその籍を置いており、その点でも従来の研究における対象者である親の取り巻く環境とは異なる。そのため、従来研究してきた発達障害児の親のストレスと、ADHD の子どもを持つ親のストレスには違いがあるのではないかと、考えられる。そこで筆者は、ADHD の子どもを抱える母親を対象にしてインタビューを行い、そのストレス状況を実態調査的に明らかにすると同時に、支援していくポイントを探っていくことにした。

### 【方法】

●対象者：愛知県の A 市と B 市それぞれにある 2 つの ADHD 児親の会に参加しており、ADHD（あるいは ADD）と診断された子どもを持つ母親を対象とした。29 名の協力への承諾を得た。その中でインタビューの日程調整のついた 19 名の協力を対象とした。インタビューをした結果、そのうち 3 名は、診断がなかったり、診断名が ADHD（あるいは ADD、ADHD 傾向）についていなかったりしていたため、本研究の対象から外した。その

結果、分析対象者は16名となった。

●調査時期：2002年7月から10月にかけて行われた。

●調査法：個別の面接法が用いられた。

●手続き：調査場所は対象者の任意で対象者自宅、対象者自宅付近の飲食店等で行われた。面接では対象者に対し「お子さんにADHDの特徴が現われ始めてから今までどんな苦しいことや大変だったことがありましたか」という質問をし、自由に語ってもらった。この質問は自閉症児の母親のストレス構造を調べた丹羽（1991）のインタビューにおける質問を、本研究対象の母親に合わせて筆者が一部変更したものである。また上記の刺激で語られなかったときに、丹羽（1991）が分類した母親のストレス8項目、さらに新美・植村（1984）が行った自閉症児を多く含む心身発達障害児を抱える家族を対象にした大規模な研究で得られたストレス因子を参考に、具体的な項目として構成された12項目の質問を用いた。語られた内容はカセットテープに録音された。1回のインタビューは2～3時間であった。

●分析法：逐語録を作成し、母親が不注意・多動・衝動性を持つ子どもを育てる中で感じるストレスが語られた部分を分析対象とした。分析にはKJ法（川喜田、1970）が用いられた。まず、母親によるストレスの語りからまとまった意味内容を抽出し1枚のカードに記述した。その結果、カードは629枚作成され、心理学専攻の大学院生3名により、それらのカードが意味内容から、グループ分けされた。

\* 対象者設定の修正：対象者の内訳を見ると、子どもにADHDの診断はついているものの、後にPDD圏に診断名が変わっているケースがある。また中にはその生育歴から子どもの診断名がADHDのみの場合でも、広汎性発達障害（以後PDD）圏の障害を疑うケースもあり、後に、診断名が変わる可能性を含んでいるものも多かった。しかし、この対象者の子ども達が、一度はADHDの診断がついたのは、不注意・多動・衝動性の問題を抱えているからであり、ベースとなっている障害が異なっているとはいえ、その症状が同じであるなら母親のストレスもまた同じであると考え、本研究では、かつて一度でもADHDと診断されたことのある子ども達を「ADHD診断群」と呼ぶことにし、不注意・多動・衝動性の問題がある子どもの母親のストレスを扱っていくこととする。

### 【結果】

上記の手続きにより、629枚のカードはまず意味内容

がほぼ同じである481のカテゴリーに分けられた（第1段階）。そのカテゴリーをさらに意味内容からまとめていき481カテゴリーの上位概念として170カテゴリー（第2段階）、170のカテゴリーが37のカテゴリーに集約され（第3段階）、さらに10カテゴリー（第4段階）、最終的に大きく4つのカテゴリーと（第5段階）、68枚の‘紙きれ’（他のカードと同じグループに入らないカードのこと）に分類された。大きな4つのカテゴリーはそれぞれ、I 対人関係の問題、II 様々な機関に関する問題、III 母親自身の問題、IV 診断前後・現状・将来に関する問題となった。

### 【考察】

本研究では、ADHDという診断についている子どもを持つ母親のストレスの分類をしたわけであるが、先行研究で示された発達障害児の母親のストレスとは大きな枠組上の違いは見られなかった。しかし、その枠組みの中身の差はいくつか見られた。その中でも特に特徴的なのは、子どもの暴力の問題と、障害の診断の難しさによって起こってくる医療機関への不満・不信である。まず、暴力の問題であるが、ADHDの合併症として反抗挑戦性障害、行為障害の問題があり、他の発達障害では必ずしも危惧される問題でないことからも、この問題がこのグループの特徴であるといえる。そして、その暴力は実際に母親やきょうだいに対して向かっていることが今回明らかになり、早急な介入の必要性がある側面と思われる。また、ADHDが高機能自閉症やアスペルガー障害との鑑別が難しいという問題により、診断名が曖昧で、一度診断がついても後に診断名が変わる、診断機関によって診断が異なる、ということにつながり、その点で医療機関への不満・不信の声があげられていた。また、薬への不安もある。診断が確定困難な事例では親は慢性的悲哀の概念が役立つとした中田ら（1995）の指摘もあるように、医療機関はそのような親の状態を理解し、もっと母親の医療機関に対する不信に対して敏感になる必要があると思われた。

### 【今後の課題】

今回、不注意・多動・衝動性の問題を持つ子どもの母親のストレスを実態調査的に明らかにすることを目的として本研究が行われたため、他の障害をもつ母親のストレスとの違いを明らかにすることは出来なかった。今後の課題として、対象群を用い、比較・検討する必要がある。また、時間軸的なストレスの分類も必要であると思われた。